

で、どうする？

7月中旬、大雪山系トムラウシ山での事故は、中高年登山界に大きな衝撃を与えた。大きな衝撃の第一は、旅行会社主催の登山ツアーであったこと。思いがけない事故だったから衝撃が大きいのではなく、いつかやるんじゃないかという予想が、ズバツと当たったところに大きな衝撃を受けたのだ。第二は低体温症、夏山での凍死である。

岩崎は、アルパインツアーサービス(株)で実施している「岩崎元郎の地球を遠足」の第14回で、ノルウェーのヨーテンハイメン国立公園をハイキングしているとき、ツアーリーダーから「日本で大変な事故が起きたようですよ」と、アミューズトラベルの事故を知らされた。20日に帰国して我が家に戻り、取っておいてくれた新聞に目を通して、事故の概要を知ることができた。

自分が中高年登山ブームの仕掛け人とは思っていないが、燎原の火に油を注いだ一人であることは、自認している。1995年7月～9月に放送したNHK教育テレビ番組『中高年のための登山学』が、その「油」であった。みなみらんぼうさんとぼくの凸凹コンビが効を奏したのか、教育テレビとしては視聴率が高かったと聞く。

「岩崎さんのテレビを見て、山登りを始めました」。山で会う多くの登山者から、そんな風に声かけられた。中高年登山が大ブレイクして、日本百名山のオーバーユースが問題になるほどに中高年登山者が増えた。

『登山の運動生理学百科』の著者でもある、鹿屋体育大学の山本正嘉教授によれば、20歳のときの体力を100とすると、1歳加齢する毎に体力は1%ずつ減少するという。

中高年になれば、若いときと同じようには、登れないということをなのに、それと自覚しない登山者が少なくない。中高年登山者が増加した分、中高年登山者の事故が増加した。行きたい山と、行ける山とのギャップに気づこうとしない中高年登山者。

いや、気づいているのかも知れない。旭岳からトムラウシを縦走してみたいけど、テントやコンロ背負ってじゃもう歩けないしな、ポーターでも付けてくれればいいんだけど。危機管理が明快な旅行会社は、テントやコンロを背負う体力のない人は、旭岳からトムラウシの縦走は無理と判断する。営利優先の会社は、テントやコンロはスタッフが背負うから、気軽に参加を誘う。天気が良ければ、問題など発生しない。危機管理とは、最悪の状況を予想してどうするかを考え、対策を構じること。

さて、これからの山登りをどうする？ まず第一は、行きたい山が、自分の力で行ける山か否か判断できる、山を見る目を養って頂きたい。第二は、行きたい山を数多くまな板の上に並べられるように、山を見つけ出して欲しい。第三は、行きたい山に行くことができるように、日頃のトレーニングを怠らない。70歳になると、20歳のときの半分の体力しか残っていないのだ。歩けるうちは、歩き続けるとしよう。

低体温症については次号。